

## 震災と音楽

近年、社会の課題に向き合う音楽活動に注目が集まっている。紛争解決、貧困問題、移民受け入れ、自然災害、環境破壊などに対して、音楽は何ができるのだろうか？ 大切なのは、「音楽の力」を過大評価も過小評価もしない冷静な態度だろう。



復興コンサート2014年5月9日（撮影・佐々木隆二）

豊かなものになり、悲しみの感情があらわれ出たと証言している。

一カ月が過ぎると、多くの音楽家が被災地を訪れ、被災者に音楽を届けるようになった。もちろん、なかには、被災地で我儘を言ったり、自分の音楽を被災者に押しついたり、被災の凄まじさにショックを受けたままステージに上がったりして、被災者から響きを買った人もいた。音楽さえあれば、皆がハッピーになるという単純な話ではない。震災後に作られた数多くの「復興支援ソング」も、すべてがいつも人を元気づけることに寄与したわけではなかった。しかし、被災を思い、こめられた願いは、それが真摯に音を通じて伝えられたとき、人びとの心を動かした。

### 被災地と非被災地を結ぶ

映像や録音技術が向上し、テレビやインターネットが普及した現在では、これまでとは異なる方法で音楽が社会的機能を果たす。震災から一年を経て作られた《花は咲く》は、被災地とそれ以外の地域を結び役割を担った。東北にゆかりのある有名人が次々と登場し、歌の一節を（それぞれのやり方で）心をこめて歌いあげていく《花は咲く》は、被災地から遠く離れたところにいる人びとに、震災はまだ終わっていないことを思い起こさせ、被災者は、自分の人生を振り返りながら、次世代に自分は何を残したのかと問う歌詞に、生き残った自分の複雑な思いを重ね合わせた。東北を離れ避難してきた人たちも、この歌を歌いながら故郷を想った。「〇〇万人の花は咲く」という特設ウェブサイトには、世界中の人たちが創作したユニークな《花は咲く》が投稿され、震災への思いを共有した。

### 人と人をつなぐ

震災から二年が過ぎると、音楽は人々とのかわりを深めるものとして機能し始める。音楽の力による復興センター・東北は、震災で家を失い、転居や仮設暮らしを強いられている高齢者による「みやぎの「花は咲く」合唱団」を結成した。合唱をするのは初めてという多くの団員たちが、仙台フィルハーモニー管弦楽団と一緒に《花は咲く》を歌うことを目標に、練習に励んだ。仙台に移り住んだある老夫婦は、孤立した苦しい日々

なかむら  
みあ  
中村美亜

九州大学大学院准教授

「音楽に力がある」ということばが適切であるのかどうかはわからない。だが、東日本大震災後、音楽が被災した人びとの心を癒やし、励まし、「力」を与えることに何らかの貢献をしたことは事実だろう。

### 自分を取り戻す

震災直後には、自衛隊音楽隊のメンバーが被災地で慰問演奏をおこない、地元の学校の吹奏楽部や合唱部が小さな演奏会を開いた。仙台フィルハーモニー管弦楽団のメンバーも、三月末に小規模編成のアンサンブルによる「復興コンサート」を開始した。震災で必要なのは食料や物資、それに復旧に必要な労働力で、音楽など無用だと思われるかもしれない。しかし、日常生活からバックグラウンド・ミュージックが消えた空間で、共同生活で自分一人の時間が失われたときに、緊張が続き身体が硬直しきった状態のなかで、音楽は被災者に自分の素の気持ちを取り戻す機会を与えた。当時、被災地で音楽活動をした人たちは、共通して、聴いている人たちの顔が、音楽を通じて震災前のかの顔を思い出したのか、無表情から表情



コンサートで仙台フィルと歌うみやぎの「花は咲く」合唱団  
2014年4月23日（撮影・佐々木隆二）

を送っていた。田舎から都会に来て、狭いアパート暮らしとなり、以前のように大きな声で話し、気兼ねなく物音を立てることができなくなった。仲間がどこにいるかもわからず、体も動かさなくなっていた。そんなときに合唱団にめぐりあい、歌を始めた。大きな声を出して歌うことは、肉体的にも精神的にもフレッシュになる。《花は咲く》は難しいけれど、毎日練習して、歌えるようになってくるとうれし。生きる喜びを感じる。そうだ。合唱団で仲間もでき、停滞していた生活が音を立てて動き始めた。

音楽に「力」があるのかどうかはわからない。だが、震災後、音楽は思いを伝え、「力」を生み出す契機となった。そして、音楽は人が生きのびるための居場所ともなっている。



みやぎの「花は咲く」合唱団 練習（撮影・音楽の力による復興センター・東北）